

テーマ

33 ジェンダーで何がわかるか

光本 順

ジェンダー視点による考古学的アプローチは、背景とする理論や実際の分析方法、さらには自らの立場性によっても大きく異なる。ここでは日本におけるフェミニスト・ジェンダー考古学の学史的評価を軸に、いくつかの論点について議論する。

フェミニスト・ジェンダー考古学 ジェンダーに関する研究は、欧米考古学と日本考古学とで幾分時差をもちつつ展開したものといえる。まず欧米におけるフェミニスト・ジェンダー考古学の動向 (Renfrew and Bahn 2004) を概観したい。欧米でフェミニスト・ジェンダー考古学が誕生したのは1980年代前半である。それは、社会的につくられた性としてのジェンダー概念を用いながら男性中心主義の乗り越えを図った、1960年代以降の第二波フェミニズムの影響を受けたものである。そこにおいて、研究者のジェンダー・バイアスおよびジェンダー・ステレオタイプに関する批判的検討や従来の性別分業論の再検討がなされた。こうした研究は、1990年代前半に受け継がれるが、後半以降になると白人中産階級女性中心のあり方への批判を含む第三波フェミニズムの影響がフェミニスト・ジェンダー考古学において認められるようになった。その結果、「女性」というカテゴリー内部の差異が重視されるとともに、ジェンダーを静的な役割としてではなく能動的な過程としてとらえ直す理論的枠組みが導入された。

一方、日本において「ジェンダー考古学」または「フェミニスト・ジェンダー考古学」と冠する研究は、1990年代半ばからはじまった。その特色は、第二波フェミニズムおよびそれを基礎とする欧米のフェミニスト・ジェンダー考古学の成果を的確にレビューしながら、ジェンダー概念を日本考古学に取り入れた点が挙げられる。日本のフェミニスト・ジェンダー考古学は、80年代から90年代の欧米のそれと同様に、研究者のジェンダー・バイアス/ステレオタイプを問題化しながら (藤村 1996、松本 1998、松本他 1999)、考古学の視点から日本の原始・古代・中世社会における性

別分業の長期的歴史を再考する試み (菱田 2000) 等がなされてきた。この点において、日本の女性史研究に呼応した1980年代の女性史関連の考古学とは異なるものである。こうした第二波フェミニズムを理論的柱とする研究の基本的方向性は、「女性」カテゴリーの内部の多様性へ着目する必要性については表明されてきたものの (菱田 2004)、現在においても受け継がれている。

このように日本のフェミニスト・ジェンダー考古学は、欧米のそれに変化の兆しが芽生えた頃に、誕生した。日本のフェミニスト・ジェンダー考古学は、ジェンダー・バイアス/ステレオタイプに対する警鐘として重要な位置を保ち得た。理論的には、欧米における1990年代後半の新たな流れについて、必ずしも積極的にくむ形で議論が形成されてきたとはいえない。しかしながら、日本考古学という前提自体が、非英語圏であり東アジアに位置する「女性」の多様性を示す実践として、結果的に第三波フェミニズム的意義の一部を含意したという評価も可能ではなかろうか。

クィア考古学 ところで、ジェンダー/セクシュアリティと密接に関連する研究領域として、第三波フェミニズムと理論面において基盤を共有すると同時に、独自の性格を有するクィア・スタディーズがある。それに触発されたクィア考古学は、異性愛規範を中心とする規範性そのものへの対抗、そしてその脱中心化の指向を特徴とし、2000年を前後して欧米ではじまった。クィア考古学を提唱したトーマス・ドーソンは、そのねらいを規範性への対抗にあるとする (Dowson 1998 = 2000, 288)。しかしクィア考古学の範疇は幅広く、異種混交的な感すらある (光本 2009)。議論の幅広さの要因としては、以下の点が挙げられる。クィア・スタディーズはもともと同性愛者への蔑称である queer という言葉を逆手にとった対抗的性格を有する。そのため、クィア考古学も、異性愛規範に関する批判や、同性愛の歴史の解明といった性現象 (セクシュアリティ) にかかわる領域から、よ

り一般的な規範そのものへの問いまで幅が広い。また、現代社会と過去の歴史との安易な同一化による、クィアな主体の探求に非常に慎重な立場もあれば、セクシュアリティ考古学という脈絡で積極的に同性愛の歴史を復元するという立場もある。

課題 ここまでの研究動向を踏まえ、日本考古学におけるジェンダー研究の課題を考えたい。

第一に、クィアな視点からみると、日本のフェミニスト・ジェンダー考古学のめざす歴史が、結果としてあくまで女と男の関係史に収斂してきたようにうつる。もちろん、女性性や男性性に関する歴史的追究は、普遍主義、すなわち伝統的・固定的な性別分業観への対抗という政治的意味合いにおいて、広く歴史学的課題として位置づけられるものである。一方、男女という2つの性のみを普遍視・当然視する社会とシステムについて、クィア・スタディーズでは「異性愛規範」と呼ぶ。女と男の考古学の試みもまた現代の異性愛規範に従順であるともいえる。もっとも、日本のフェミニスト・ジェンダー考古学が欧米のクィア考古学の動向を、セクシュアリティの歴史的・文化的多様性を示す研究として最初に紹介した点（松本2004、193）は重要である。ただしその意義には二側面がある。一つはクィア考古学の一側面である同性愛者という主体に焦点を当てる道を拓いたことであり、もう一つはそれと男女の関係史という枠組み自体の共存を図ったものともいえる。

第二に、ジェンダーと性別の関係についても、整理の余地がある。日本のフェミニスト・ジェンダー考古学のいうジェンダーは、性別としての女性や男性に立脚した歴史的主体を意味する。しかしながら、ジョーン・スコットのいう肉体的差異に意味を付与する知としてのジェンダー（スコット1992、16）のように、肉体的差異もまた知の中で認識され、再生産されるとする枠組みに基づくならば、人間をジェンダー化する過程の歴史、すなわち主体ではなく主体化の歴史の解明という課題を見出しうるだろう。例えば、物を通じてどのように異性愛規範が歴史的に再生産されたのかという問いもここに含まれる。

第三に、考古資料の意味の多義性を重視した実践が必要なものと考ええる。資料に無理に男女の性

別を付与し、それに立脚したジェンダー史を展開するよりもむしろ、資料の多義的性格に着目すべきではないだろうか。それは先のジェンダー化の物質的基盤を考える手がかりにもなろう。

以上、いくつかの課題を抽出してきた。最後に、ジェンダーにかかわる研究には様々な違いを超えて通底する面も存在する。すなわち、ふとした違和感から生きがたさのレベルまで、現在の問いを研究のきっかけや原動力としていかしうる点である。こうした政治色には賛否両論もあろう。しかしながら、ある種の古風で泥臭い性格もまた、この分野の学問的魅力の一つではないだろうか。

引用文献

- Dowson, Thomas A. 1998. Homosexualitat, teoria queer i arqueologia, *Cota Zero* 14: 81-87. = 2000. Homosexuality, queer theory and archaeology, In *Interpretive Archaeology: a reader*, edited by J. Thomas. 283-289. London and New York: Leicester University Press.
- 藤村淳子 1996 「日本考古学とジェンダー」『女性史学』6、83-89 頁
- 菱田（藤村）淳子 2000 「男女の分業の起源」『古代史の論点』2 小学館、77-98 頁
- 菱田（藤村）淳子 2004 「考古学と女性の視点」『文化の多様性と比較考古学』335-344 頁
- 松本直子 1998 「ジェンダー考古学の現在」『女性学年報』19、43-51 頁
- 松本直子 2004 「ジェンダー」安斎正人編『現代考古学事典』同成社、189-194 頁
- 松本直子・中園聡・川口香奈絵 1999 「フェミニズムとジェンダー考古学基本的枠組み・現状と課題」『HOMINIDS』2、3-24 頁
- 光本 順 2009 「クィア考古学の可能性」『論叢クィア』2、95-107 頁
- Renfrew, Colin, and Paul. Bahn. 2004. *Archaeology: Theories, Methods and Practice, fourth Edition*. London: Thames & Hudson.
- スコット、ジョーン・W（荻野美穂訳）1992 『ジェンダーと歴史学』平凡社